

平成 28 年 11 月 28 日

第 11 回 有機化学系教科担当教員会議 議事録
(薬学教育協議会主催)

1. 日時：平成 28 年 11 月 6 日(日) 13:30 ~16:50
2. 場所：静岡県立大学看護学部 4 階 13411 教室
実行委員長 森 裕二 (名城大学)
実行副委員長 眞鍋 敬 (静岡県立大学)
実行委員 原 脩 (名城大学)
3. 出席者：向 智里 先生 (化学系薬学部会長、金沢大学副学長) および国公立大学の
有機化学系教員 合計 95 名 (招待者 3 名を含む)

4. 本会議

議題：『力量あるくすりの専門家を育てるために化学系薬学が果たすべき役割』

(1) 開会の挨拶 名城大学 森 裕二

(2) 特別講演

演題「「薬学・薬剤師」教育と有機化学：第 11 回有機化学系教科担当教員会議を迎えて」

化学系薬学部会長 金沢大学副学長 向 智里 先生

座長 名城大学 森 裕二

(3) アンケート集計報告および質疑応答

報告 名城大学 原 脩

(4) パネルディスカッション

司会進行 明治薬科大学 齋藤 直樹 先生

パネリスト

・帝京大学 高橋 秀依 先生

・神戸薬科大学 宮田 興子 先生

・東京大学 大和田智彦 先生

全体討論

(5) 本会議の今後の進め方および次年度以降の開催について

(6) 懇親会 (会場：静岡県立大学 学生ホール)

5. 会議報告

(1) 開会の挨拶

本年度幹事校である名城大学 森 裕二委員長より、静岡県立大学での開催の経緯
説明の後、挨拶があった。

(2) 特別講演

名城大学 森 裕二委員長を座長に、「「薬学・薬剤師」教育と有機化学：第 11 回有機

化学系教科担当教員会議を迎えて」と題して、化学系薬学部会長であり、また金沢大学副学長でもある向 智里先生より、有機化学系教科担当教員会議発足の経緯や本会議の現状や役割についての、確認や感想が述べられた。その中には発足時において本会議の役割に対して全大学の共通認識の形成の有無や中央会議への意見の反映などの問題点が指摘され、今後、議論を明確化するためには4年制、6年制等、それぞれの立場で議論ができる分科会の設置などの提案が盛り込まれていた。これに基づき参加者より、多くの意見が出された。

(3) アンケート集計報告および質疑応答

全国74大学に実施されたアンケート結果が、名城大学 原 脩委員より報告された。その結果では多くの大学で新コアカリをベースに各大学の事情のもと独自性を持った有機化学教育が行われていることが示された。特に6年制教育に於いては、他分野との連携の試みが進んでいる、または進みつつあることが明らかとなった。4年制教育では6年制との差別化を図り、これまで以上に創薬化学等研究者養成を意識した教育が実施されていた。この他、多くの大学で6年制制度スタート後に次世代を担う若手研究者や教育者育成に向けた不安感が示され、各大学独自の方略で対応していることが明らかとなった。

(4) パネルディスカッション

司会進行に明治薬科大学 齋藤 直樹先生を招き、今回のパネルディスカッションの経緯説明があり、各パネリストより発表が行われた。まず、帝京大学 高橋秀依先生からは、国立、私立大学3大学の6年生に対して、実務実習期間中で基礎系科目との連動に関するアンケートを実施し、その結果が報告された。その結果、実務に於いて学生たちにとって化学系科目の有用性を見出せないでいる学生が多く存在し、今後、臨床現場で活用するには、化学構造がキーワードとなることが示された。次に、神戸薬科大学 宮田興子先生が、卒業生から臨床現場での問題点を収集し、これを有機化学的に解釈、理解に結びつけるためのセミナー開催の紹介があった。現在は研究室レベルの実施では有るが、卒業生だけでなく、教員にとっても有意義な取り組みであることが示された。最後に東京大学 大和田智彦先生から、米国薬学部 Pharm. D コースにおけるメディシナルケミストリーの教育レベルの高さと、これが医師からの評価の高さの裏付けにもなっていることが紹介され、ひとつの薬学教育の方向性が示された。全体討論では、今後の有機化学教育の方向性を示す上で、薬学独自の有機化学の教科書の必要性などの意見が出された。

(5) 来年度開催について

来年度 委員長：杉原 多公通 先生 (新潟薬科大学)

副委員長：井上 将彦 先生 (富山大学)

日時、会場：平成29年11月5日(日) 富山大学 五福キャンパス